

請戸小の「奇跡」に福島復興の手がかり 手を携えて「大平山」登る

朝日新聞デジタル 2022年1月26日 配信

記者コラム「多事奏論」 編集委員・駒野剛

1月6日。青空の下、300m 先は海が広がる。周囲が平原のような場所にポツンと東日本大震災の遺構施設が立っている。あの日まで、児童93人が学んだ福島県浪江町立請戸(うけど)小学校の旧校舎である。発災後、浪江町には最大15.5mの津波が押し寄せた。同町の震災による直接死182人の85%がこの小学校のある請戸地区の人々で、水死が大半だった。

平原に見えたところは、津波が全てを破壊した痕だ。残ったのが鉄筋コンクリート建ての請戸小校舎だった。町は防災を考えるきっかけにもらうため、整備して昨年10月24日から震災遺構として公開した。

教室の壁が落ち、大きな金庫などが転がる。曲がった時計盤なども残され、津波の衝撃力のすさまじさを今に伝える。と、ここまで読んで「児童たちはどうなったのか」と疑問を持たれた方もおられるだろう。結論を先に言えば、教師を含め全員が助かった。町が作ったパンフレットは、そのことを「奇跡」と書いている。学校の標高は3~4メートルほどしかない。周辺は平地で、津波が発生したとき逃げるとしたら、約2km離れた標高40mほどの大平山(おおひらやま)ぐらいしか見当たらない。

その日、5時間目の授業が終わろうとした頃、大きな揺れがやってきた。「はやく校庭に」。指示されて児童らが集まると、校長が叫んだ。「とにかく高いところへ、大平山へ」。余震が続く中、大平山を目指した。この間、8分ほど。難関は続く。途中には車で渋滞する県道、通称「浜街道」が行く手を阻む。教師たちは車を制止して児童たちを渡らせる。中には、車いすの児童もいた。おぶって大平山へ向かった。

しかし登り口が分からない。そんな時、一人の児童が「この道から山に登れるよ。野球の練習で来たことがあるんだ」。登る最中、海から不気味な音が聞こえてくる。避難から約1時間後、山頂に全員が到着できた。その頃、請戸地区は壊滅していた。奇跡だったのかも知れない。ただ、奇跡を引き寄せたのは、教師たちの的確な判断と、児童たちと助け合い目標を目指した絆の強さがあつたればこそ、でなかったか。

この話を取材、絵本(有償)にして約1万冊を全国に配っているのが東京のNPO「団塊のノーブレス・オブリージュ」だ。「高い身分に伴う義務」を意味するフランス語を団体名に冠すのは、日本の成長期に生まれ育ち、その受けた恩恵を、定年後も社会貢献で返したいと考えたからだ。大震災前から都会と地方との交流を手がけていたが、3・11後、何かできることがないかと考え続けた。現地を訪ねることになり、請戸小のことを知った。

「犠牲を出さず皆で逃げた。人がつながって生きる大切さを学びました。請戸小の教訓を通じ、多くの人に自分の大平山があるか問いかけたいと考えたのです」と事務局の岡田大一さん(42)は話してくれた。

福島市から浪江町中心部に向かう途中、山間部の同町津



公開された浪江町立請戸小学校の震災遺構。太平洋が間近だ=1月、福島県浪江町



NPO「団塊のノーブレス・オブリージュ」が作った絵本。津波からいかに避難したかを描いている

島地区を通った。自動車内で突然「ピーピーピー」という警告音が鳴る。放射線量の測定機が検知したのだ。通行中の最大値は毎時2マイクロシーベルト。多くの自治体が除染の目安としている0.23マイクロシーベルトと比べて、やはり高い。

同地区の赤字木(あこうぎ)集落は良質な松として知られた「津島松」の産地だったが、帰還困難区域に指定され、住む人はいない。昨年、大震災から10年がたち、復興五輪の名の下、浪江町や原発が立地した双葉町などで聖火リレーが行われたが、福島が復興したなどと、到底語ることはできない。しかし、絶望だけでは福島は救われない。福島の人々の苦難と克服への思いを、私たち日本人全てが共有し合って生きてゆく。そうした絆を強くしていくことが、真の復興への手がかりだと思えてならない。この国の大平山を、皆で登っていこう。

(編集委員・駒野剛)